

元関脇 旭天鵬

大島勝

親方として相撲部屋を持ち、 大相撲を盛り立てていきたい



多くの関取が、三〇代を前にすると、

「引退」の二文字を意識するようになるという。

ところが、三七歳で幕内最高優勝を果たし、

四〇代に入って、敢闘賞をもぎ取り、

引退の危機が迫っても、「もう一度頑張ってみよう!」と

士俵に上がり続けた関取がいる。

◀角界のレジェンド▶元関脇の旭天鵬関である。

モンゴルから十七歳で来日し、その柔和な笑顔の奥で

どれだけの汗と涙を流したことだろう。

人気力士から親方へ、新たな相撲人生の決意を聞く。

木村 現役のお相撲さんは着物姿ですから、引退までスーツはお持ちじゃなかったんでしょう。

大島 はい、引退した昨年七月場所の後すぐにモンゴルに里帰りすることになっていたので、名古屋から東京に帰った夜、サカゼン(9Lサイズまでの服を売る店)に行っていて、スーツ、シャツ、ベルト、靴、ネクタイなど全部揃えたんです。替えのシャツも三、四枚要るし、洋服生活がこんなに面倒とは知りませんでした。

木村 洋装で、いちばん難しいのは何でしたか？

大島 ネクタイですね。着物は首まわりも裾も、ゆったりしていますが、ネクタイは首を絞められるように苦しくて、締め方も難しいんです。モンゴルで親戚のお葬式があったとき、困りましたよ。ユー・チューブで締め方を検索して勉強したんですが、結果的に締めることができずに、会場に持って行って締めてもらいました。(笑)

木村 いまや、三横綱・一大関がモンゴル勢で、大相撲人気を牽引しているといっても過言ではないくらいですが、そのパイオニアのおひとりの親方が、どうして大相撲の世界に身を投げられたのか、その辺りからお聞

かせください。

大島 モンゴルは一九九〇年まで社会主義の国だったんです。当然、入ってくる情報も限られていて、日本のことも「チョンマゲを結って腰に刀を差している」くらいのイメージしかありませんでした。民主化で一気に海外の情報が入るようになった頃、僕は中学を卒業して、溶接とかブルドーザーの技術を学ぶ専門学校に通っていたんです。

木村 将来の夢や目標はあったんですか。

大島 体格がよかったので、バスケットボールやモンゴル相撲からの誘いは受けていました。だからスポーツ界に進むか、四人兄弟の

木村 角界から初めてお客さまをお迎えして、お話をうかがうのが大いに楽しみです。実際にお目にかかる時、やはり大きくて圧倒的な存在感ですね。

大島 大きいですか？ まさか『5L(フアイブエル)』って服のサイズのことじゃないですよ？

木村 あははは。親方(元関脇・旭天鵬関、現・四代目大島親方)の日本語力とユーモアセンスには敵いませんね。でも、今日のマゲにスーツというファッションは、貴重なお写真になりますね。

大島 ちよっと、バランスが変ですけど、引退した時点で相撲取りは着物を着ないのが慣例で、五月二九日の断髪式までは、このスタイルなんです。



2012年、大相撲夏場所千秋楽。優勝制度が制定された1909年以降では最年長となる37歳8カ月での幕内初優勝を果たし、支度部屋で賜杯を手に喜ぶ旭天鵬。
写真提供：共同通信社

大島 勝（おおしま・まさる）元関脇・旭天鵬 1974年9月13日、モンゴル・ナライハ市（現ウランバートル市ナライハ区）生まれ。92年2月来日。元大関・旭國の大島部屋に入門し、同年3月場所に旭天鵬の四股名で初土俵を踏む。96年3月、新十両、98年1月、新入幕。191センチの長身を生かした右四つ寄りを武器に活躍し、02年1月、新小結、03年7月、新関脇に昇進。05年にはモンゴル出身力士として初めて日本に帰化。12年4月、友綱部屋に移籍。直後の5月場所で初優勝。37歳8カ月での初優勝は史上最年長記録。14年9月、40代での幕内勝ち越し。同年11月、史上最年長で敢闘賞受賞。「角界のレジェンド」と称される。15年7月場所限りで引退し、年寄大島を襲名。優勝1回、敢闘賞7回、金星2個、幕内在位99場所（史上2位）、幕内出場1470回（史上1位）で697勝（史上8位）、773敗（史上1位）、15休。著書に『気がつけばレジェンド』。

大島 脱走してから一カ月半後に、先代大島親方が部屋に残った三人を連れて、モンゴルに来てくれたんです。そのとき脱走した三人のうち、僕だけが両親と一緒に親方に呼ばれました。親方には「お前は絶対に強くなる。これからはモンゴル出身力士の時代になるから戻って来い」などと諭されました。そのときに思ったんです。選考会で僕が初戦に負け



1992年、モンゴルから一緒に来日して大島部屋に入門した5人の仲間とともに初土俵を踏む。旭天鵬は後列右。その左隣には旭鷲山。当時は17歳で189.5cm、93kgだった。

写真提供：ベースボール・マガジン社



長男として手に職をつけて両親を助けるか……そんな感じでした。専門学校に進んだのは、もともと機械や車が好きだというのもありましたが、通学しながら国からお給料がもらえたのも魅力でした。親の給料の半分ぐらいありましたからね。だけど当時は反抗期というか、勉強より友だちと夜遅くまで遊ぶほうが楽しくて、父には怒られてばかり。きっと父はグレかけていた僕の将来が心配になったんでしょう。専門学校二年生の冬、「日

んですね。

木村 ホームシックにかかって、マイナス思考に陥ってしまったんですね。

大島 そうですね。でも僕らバスポートを親方に預けているから、帰りたくても帰れない。そうしたら、六人のうちの一人が、渋谷にモンゴル大使館があるのを調べてきて、大使館には自国民を保護する義務があるはずだから、もし親方が来ても渡さずに守ってくれろと思っただけで、そこに逃げ込むしかないと考えました。そうして入門から約半年後、最終的には五人で部屋を脱走したんですが、親方とおかみさんが大使館に来て話し合いになって、旭鷲山ともう一人は部屋に戻りました。家に電話したら母が「つらいなら帰っておいで」と言ってくれたんですが、父は何も言わなかったですね。でも僕らは頑として帰国すると言いつけて、十日後三人でモンゴルに逃げ帰ったんです。

木村 帰国されたままだったら、いまの親方は存在しなかったわけですが、もう一度やってみようと思われたきっかけは何だったんですか？

大島 脱走してから一カ月半後に、先代大島親方が部屋に残った三人を連れて、モンゴルに来てくれたんです。そのとき脱走した三人のうち、僕だけが両親と一緒に親方に呼ばれました。親方には「お前は絶対に強くなる。これからはモンゴル出身力士の時代になるから戻って来い」などと諭されました。そのときに思ったんです。選考会で僕が初戦に負け

本の大相撲が力士の募集をしている、お前なら年齢も体格もすべてクリアしているからウランバートルで行われる選考会に行け」と言い出したんです。この募集は民主化で日本との交流が活発になって初めて実施されたもので、タイミングがよかったということですね。木村 なるほど、かわいい子には旅をさせようということでしょうか。私にも息子がいますから、お父さまの気持ちはよく分かりますよ。

大島 最初は驚きましたが、日本に行けるなんてめったにないチャンスだと思って、とりあえず選考会に行くことにしました。もちろん、その頃は日本がキラキラ輝く先進国だということとはテレビなどを観て知ってはいませんでした。同級生の兄が持っていたソニーのウォークマンには衝撃を受けました。こんな素晴らしい技術のある日本に行ってみたくも思いました。

木村 その選考会には、どのくらいの応募者があったんですか？

大島 一六〇人くらいです。多すぎたのか、まずモンゴル相撲を取らせて八〇人に絞ったんです。僕はモンゴル相撲の経験もなかったので一回戦で負けてしまい、帰る支度をしていたら、通訳の方が来て「親方がもう一回、相撲を取れと言っている」と言われ、たまたま勝って六人の合格者の一人に選ばれたんです。

木村 実際に来日されて、大相撲の印象はいかがでしたか？

大島 たときも「もう一回」と言っただけで僕を呼び戻してくれた。脱走したのに僕だけに「帰って来い」と迎えに来てくれた。大関まで昇り詰めた親方（元大関・旭國関）がここまで自分の目をかけてくれる。だったらこの親方を信じて、熱い気持ちに込めたいなと思うようになったんです。

木村 二度も呼び戻してもらえたのは、それだけの実力や可能性を認めておられたからですよ。再来日は大正解でしたが、厳しい世界

大島 こちらは観光旅行か留学でもするようない気持ちだったから、まったくダメでしたね。

あの「脱走事件」の顛末と覚悟

旭天鵬関が本当の強さを身につけたワケ

木村 何がダメだったんですか？

大島 まず、炊きたての白いご飯で、吐きそうになってしまいました（笑）。もともとモンゴルでは米はあまり食べません。食事の基本は肉と小麦粉で作ったきしめんみたいな麺が中心です。米はチャーハンにしたり雑炊にしたりするので、白いご飯は食べません。それなのに丼に山盛りですから。モンゴルには生魚も食べる習慣はありませんし、冬はマイナス三〇度にもなる国で、日本の夏の蒸し暑さも、あり得ませんでした。

木村 そういった文化や環境の違いが、あの有名な（笑）「脱走事件」に繋がったんでしょうか？

大島 ずっと積み重なったものがあったんです。相撲の稽古は朝五時から。十七歳といえど寝たい年頃なのに毎日五時起きは耐えられなかったし、先輩力士の用事も多くて自分の時間も少ない。大部屋での雑魚寝は暑いし、イビキもうるさい……。それに当時、大島部屋には二七、八人の力士がいて、入門一〇年を超えても関取になれない人がザラにいました。この人たちがなれないのに、俺たちが関取になんてなれるわけじゃないじゃん、と思った

ですから戻ったときは、さぞ大変だったのではないですか？

大島 当然、歓迎はされませんが、部屋の全員が無視ですよ。正直に言っただけで、逃げ帰る前よりも、この時の方がつらかったです。涙が出そうになったけど、グツと堪えて黙々と稽古に励んでいると、その姿を先輩たちも見てくれていて、こいつはやる気があるんだなと分かってくれたと思うんです。少しずつ、みんな話してくれるようになり、部屋頭の旭



道山さんも食事に連れて行ってくれるようになりまして。

木村 いやあ、よく耐えましたね。

大島 そりゃ、最初に来たときは全然、覚悟が違います。大相撲についても分かかってきて、その上で「絶対に上に行つてやる！」と思いました。

木村 その言葉の通り、入門から四年で新十両昇進を果たされましたが、待遇は変わったんですか？

大島 十両になると個室がもらえるのが一番うれしかったです。幕下では自分が付け人に

なつて先輩の用事をしますが、十両になると

付け人がついて用事をしてくれるので自分の時間ができるんです。それに手取りで約八〇万円くらいお給料ももらえるので、給料ナシの幕下とは別世界です。それで、昇進から半年後、父にパジェロの新車をプレゼントしたんですよ。そういうことがモチベーションになって、相撲がますます楽しくなりましたね。その上、日本の大相撲中継がモンゴルのテレビでそのまま放映されるようになったんです。でも十両以下は映らないんです。同期の旭鷲山が幕内でバリバリやっていたので

いたのは、けがで休場されたことが一度もないんですよね？

大島 はい。僕はモンゴル相撲の経験がなかったのですが、旭鷲山のような技の種類がなかったんです。だから観ているほうは面白くなかったと思うけど、正攻法で戦うしかなかったんです。逆に旭鷲山は派手に技を決めたりして観るほうは面白いです。結果的に、けがをしやすい弱点があったんです。僕がここまでやれたのは、旭鷲山が一步前を歩いてくれた

ことと、正攻法の相撲でやってきたからかなと思いますね。

木村 最終的には旭鷲山関（最高位・小結）のポジションも追い越して関脇まで昇進し、三〇代後半からは「最年長記録」を次々に塗り替え、「中年の星」と呼ばれるようになった親方ですが、体調管理などはどのようになさっていたんですか？

大島 よく聞かれるんですが、僕は普通に食べたいものを食べて、自由にやってきました。

「僕も映りたい！こりゃ、十両に留まってい

いる場合じゃない」ってね（笑）。で、幕内になれば今度は三役とかもつと上に行きたくなります。僕は、旭鷲山のように自分から進んで稽古をするほうじゃなかったんですが、故郷のテレビに映るためにも、稽古に力が入るようになりました。

木村 親孝行もできてよかったですね。現役時代の親方は一九一センチ、一六〇キロの恵まれた体格で、右四つから胸を合わせたがっぷりの体勢になると、横綱・大関だって互角に渡り合えるほどの強さが持ち味でした。驚

酒は二九歳頃から飲み始めたかな。最初は日本の飴とかアイスやコーラに興味があったので、二〇代後半になって徐々に酒が飲めるようになりました。近頃はコーヒーにハマって、やっと大人の仲間入りができました（笑）。

若いしなやかな肉体が起こした奇跡
三七歳で、幕内最高優勝を手にして……

木村 親方といえば、忘れられないのがあの三七歳八カ月での初優勝です。快挙でしたね。大島 優勝って、横綱や大関ばかりがするものだと思っていましたから、あのときは何が何だか分からなかったです。僕をスカウトしてくれた先代大島親方が定年退職となり、部屋を閉鎖するか、僕が引退して部屋を引き継ぐか決断しないといけなくなりました。色々考え抜いて「自分は、まだいける」という気持ちもあって現役を続けることを選んで、友綱部屋へ移籍をしました。だから、もしあの場所で負け越したりしていたら、「それみたことか」と言われるので必死でした。

七日目には勝ち星の数、あの大横綱・貴乃花関と並んで歴代一〇位タイになったとマスコミが騒いでくれたので、気分もグッと上がりました。優勝はお世話になった方々への何よりの恩返しになりましたし、二三年半、相撲をやっていたよかったなあとお胸がいっぱいになりました。

木村 優勝パレードでは、親方の八年後に入門した、横綱の白鵬関が旗手を務められまし



た。異例なことですよ？

大島 同門ということで白鵬関が自ら進んでやってくれたんです。本当にありがたかったです。恩人で師匠の先代大島親方にも異例ですが、パレードのオープンカーに乗ってもらいました。ちょうど息子が生まれたばかりで、以前から密かに憧れていた、片方の膝に子どもをのせて、片方の手で賜杯を持つ写真を撮るというのも実現できて、うれしかったですね。優勝したことによっていろんな人に知ってもらえたことも大きかったですね。相撲に興味のなかった同年代の人からも、勇気をもたらしたとか、俺も頑張る気持ちになったとか言われて。白鵬関が三五回もやってるんじゃないマヒしているけど、優勝って本当にすごいことなんです！

木村 そうですよ。今年一月場所の大関・琴奨菊関の初優勝も、大変な盛り上がりでした。ところで、妹さんや弟さんも、来日されているそうですね。

大島 僕には弟が二人と妹が一人いるんです。関取に定着して収入も安定してきた頃、弟や妹も地元の学校を卒業する時期がきました。僕は日本の素晴らしさがよく分かっていたので、妹を日本の学校に入れたんです。いまではモンゴル出身力士と結婚し、子どもも授かりました。下の弟は日本に遊びに来ているうちに相撲取りになりました。結局、早く辞めたんですが、日本で家庭を持ち、仕事をしています。次男はモンゴルに残りました。木村 お父さまの闘病も支えられたそうですね。

人力士も大勢いますから、これからは変わってくると思いますよ。

木村 そうですか。それは楽しみです。さて、断髪式を前に決意を新たにされていることと思います。旭天鵬関改め、四代目大島親方としての今後の夢はありますか？

大島 当面の夢・目標は五月の断髪式を成功



が、どのくらいこちらへ？

大島 父を看たのは六年間ぐらいでした。肝臓病だったんですが、モンゴルの病院では、もう何もできないと言われ、日本で療養させました。日本の医療は素晴らしい。長男として父親に最高の医療を受けさせたい、そういうことも僕が相撲を頑張る材料になりました。番付が落ちれば収入も落ちる、治療もできなくなる、だから頑張らなきゃ、となるんです。

「角界のレジェンド」の今後の夢
モンゴル出身の初めての親方として

木村 一番私がお聞きしたかったことです。親方は十一年前、モンゴル出身力士の中で初めて帰化をされました。きつと色々迷われたこともあったと思うのですが、どういう思いで難しい決断をなさったんですか？

大島 そうですね。多くの相撲取りは三〇代半ばまでに現役を引退します。三〇歳が近くになると、自分が辞めたときどうするのか気になるし、自分が辞めたときどうするのか気になり始めるんです。僕も三〇代を前に色々考えたんですが、何も思い浮かばなかった。モンゴルに帰って遊牧民になるわけにもいれないし、会社を経営するとか、そんな知恵もありません。僕は日本の相撲が好きで、最後まで相撲と関わっていたい。そのためには何を成すべきか。いろんな角度から考えて親にも相談して決めました。つまり、帰化すれば親方になれる。そうすれば腹いっぱい、好き

させることです。国技館で相撲を始めて最後も国技館で終わる重要なイベントです。いまは部屋付きの親方ですが、将来的な夢は、やはり自分の相撲部屋を持って、自分が先代大島親方に育ててもらったように、しっかりと後進を育てることですね。国籍の問題も含めて条件は全てクリアしました。

木村 親方の大島部屋再開、楽しみにしています！しかし自分の部屋を持つって、大変じゃないですか？

大島 親方一人ではできませんし、力士だけでもできません。応援者がいないと無理なんです。でも、それだけにやりがいも大きいんです。もし息子が将来、「おやじがやっているから僕も」じゃなくて、本気で相撲をやりたいと言ったら、やらせてみたいですね。

木村 そここまで親方を夢中にさせる、日本の相撲の魅力って何ですか？

大島 分かりますよ。周囲に影響されず、自分の努力次第でいくらでもやれるところ。天井は横綱まであります。モンゴルから来て、着物を着て、マゲを結び、日本の伝統やしきたりを身につけて、守ってきました。みんな一緒に大相撲を盛り立てていければ素晴らしいことだと思います。

木村 そうですね。角界も様々な危機、試練を乗り越えて、いまがあるのでしょう。スポーツであると同時に、礼を尽くした日本の伝統文化でもあります。親方の柔らかい頭脳と感性と、その人懐っこい笑顔で、ぜひ、盛り立てていってください。本日はありがとうございます。

な相撲ができますからね。両親も、お前の人生だから好きにしたらいいと許してくれました。

木村 モンゴルの相撲ファンは、複雑な気持ちもあったのではないのでしょうか？

大島 当初は、バチバチに批判されましたね。モンゴルに残っている家族は「息子を日本に売って、親兄弟がいい暮らしをしている」などと中傷されて、ずいぶん悩んでいたようです。でも、これは、親方になるための手続きの問題。それをちゃんと僕自身が説明したら、分かってもらえました。

木村 ご結婚は、その後になさったんですね？

大島 はい。日本で結婚するなら自分で戸籍を作って、嫁さんを迎え入れようと以前から決めていたんです。

木村 いまでは三人のお子さんに恵まれ、ご家庭も幸せいっぱいですね。話は変わりますが、なぜ日本人力士は勝てないんですかねえ……。

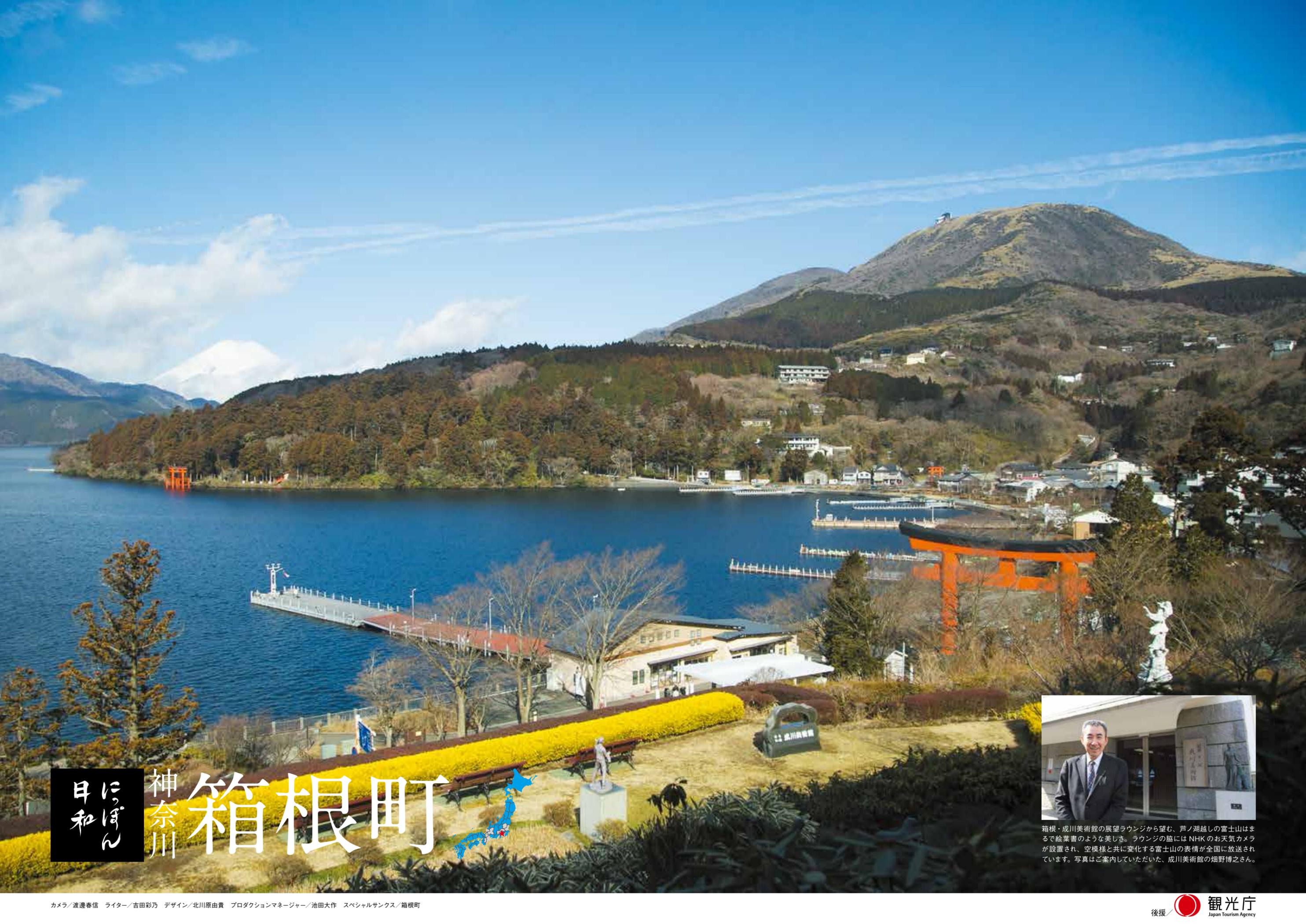
大島 気持ちの問題だと思いますよ。例えば、ホームシックにかかっても、外国から来たわれわれは大使館に逃げ込まないと家に帰れない。日本人は、いくらでも帰れる。その違いでしょう。おめおめと逃げ帰ったら家族も恥をかきますから、やるからには関取にならないと帰れないという強い意識があります。また外国人は体が大きいスピードもあるし。でも、いまは外国人のほうが目立って見えますが、一方で、じっくりと努力している日本

ございました。

対談後記

桂小金治さんは子供のころ、父親から「一念発起は誰でもする。努力までならみんなする。そこから一歩抜き出るためには、努力の上で辛抱という棒を立てる。この棒に花が咲くんだ」と諭されたというが、旭天鵬関は文字通りその言葉を実践した人だといえる。慣れぬ異郷の地での体験は17歳の少年にとつて、さぞかし過酷なものであったことは想像がつく。だが説得に訪れた先代大島親方との会食の席で、日本に残った仲間や家族に比べ自分の両親の寂しそうな表情を見て、心を入れ替え、「もう一回頑張る」と決意。その後幾多の試練に耐えて稽古に励んだおかげで、順調に番付を上げることができたという。正に「棒」が立ったのだ。そして37歳8力月での幕内優勝。ついにその棒に大輪の「花」が咲いたわけである。幕内最多出場も成し遂げ、いつしかその存在は「レジェンド」と呼ばれるようになった。このバイオニアの存在があったればこそ、今のモンゴル勢の隆盛があるといっても過言ではない。いつも柔和な表情を崩さない好漢・旭天鵬関だが、4代目大島親方となった後は厳しい姿に変貌する予感がする。でないと、お弟子さん達の立てた「棒」に「花」を咲かせることなど到底できないもの。





日 和 にっぽん

神奈川

箱根町



箱根・成川美術館の展望ラウンジから望む、芦ノ湖越しの富士山はまるで絵葉書のような美しさ。ラウンジの脇にはNHKのお天気カメラが設置され、空模様と共に変化する富士山の表情が全国に放送されています。写真はご案内いただいた、成川美術館の畑野博之さん。



創業100年以上の老舗 丸嶋本店の「元祖 箱根温泉まんじゅう」

箱根に温泉饅頭は数多あれど、元祖は丸嶋本店といわれます。箱根湯本駅の階段を下りると、向かい側の正面に丸嶋本店は見えます。創業は明治30年代半ば。かつては箱根町の旅館へ納める和菓子屋として創業しました。3代目の久保寺治郎さん(写真)も、子どもの頃から旅館への配達を手伝いながら育ったそうです。現在、多い時には2万個も焼き上げますが、伝統を守ってお饅頭一つひとつに手作業で焼印をつけています。薄皮のもちっとした食感と、餡子の程よい甘さで、飽きのこない味わいです。「元祖 箱根温泉まんじゅう」は、丸嶋本店を運営する露天風呂が自慢の温泉旅館「箱根水明荘」の売店でも購入が可能です。



元祖 箱根温泉まんじゅうは、白と、黒蜜入りの茶の2種類。何個でも食べられそうな美味しさ。

元祖 箱根温泉まんじゅう 丸嶋本店 箱根町湯本706



着色せず、木材が本来持っている個性豊かな色合いを生かしています。

箱根 寄木細工・木象嵌 浜松屋 箱根町畑宿138

全国有数の伝統的工芸品「箱根寄木細工」

何種類もの木材を寄せ合わせて、幾何学模様を作り出す「箱根寄木細工」。箱根が標高800mに位置し、樹木の種類が豊富なことから生まれた文化です。発祥は江戸後期。浜松屋は、寄木細工の技法を生み出した石川仁兵衛が約200年前に創始しました。7代目の石川一郎さん(写真)は、経済産業大臣指定・伝統工芸士のひとり。工場はいつでも見学可能。石川さんが、明るくユーモラスな語り口調で精巧緻密な技法の解説をし、実演も見せてくれます。



「本館の中でも目を引くのが、天井まで柱の高さいっぱい彫り込まれた白い尾長鶏の彫刻です。ヘレン・ケラーさんがホテルで飼っていたお気に入りの尾長鶏を喪い、悲しむ姿を見て、再び彼女が滞在したときに心を慰めるために彫られたと言います」エピソードを紹介していただいた広報マネージャーの趙 昶 賢さん。



日本初の本格的なリゾートホテル

富士屋ホテルは、創業1878(明治11)年、日本を代表するクラシックホテルのひとつです。箱根駅伝の中継放送にも登場するランドマーク的な存在でもあります。外国の要人御用達として発展し、大正11年には当時の英国皇帝アルバート陛下、皇子チャールズ殿下やその後、昭和に入るとチャールズ・チャップリン、ヘレン・ケラー、ジョン・レノン一家などのVIPも宿泊をしたこともあって、逸話には事欠きません。

富士屋ホテル 箱根町宮ノ下359



一度は食べたい貴重品「鉱泉煎餅」

富士屋ホテルの近くにひっそりと佇む、川邊光栄堂。うっかり見落とししてしまいそうなほど質素な店構えは、名物「鉱泉煎餅」の素朴な味わいを表しているかのよう。宮ノ下の名水と小麦粉・白玉粉・卵・植物油を材料とする「鉱泉煎餅」は、薄焼のぱりっと軽い食感と、ほっとする優しい味わいが特徴。店主の多田須美子さん(写真)の優しい笑顔と相まって、地元でもファンの多い一品です。一枚一枚手焼きのため、1日の販売個数はごくわずか。運が良ければ買える貴重品です。



茶筒のようなレトロな缶は、デザインも含めて明治12年の創業当時のまま。川邊光栄堂 箱根町宮ノ下184



健康的な味わいが女性に大人気「山賊粥」

はるか昔、箱根には旅人をもてなす心優しい山賊がいたとか。その山賊に由来して、訪れる観光客をお粥でもてなすのが「山賊粥」です。店長の金城源成さん(写真)によると、お粥に使用している箱根の「嬰寿の命水」には体内の不純物を流し出し、心身を浄化する効果があるそうで、滋味深いお粥で旅の疲れを癒せますように、という金城さんの思いが込められています。山賊粥 箱根町湯本724-5



お粥は、湯葉、牛テール、もつ、薬膳とりの4種類。写真は湯葉粥(1000円)。



日本有数の本格的登山鉄道

険しい山道を登る箱根登山鉄道は、様々な工夫が凝らされています。最も特徴的なのは坂道でも滑らないように、車輪とレールの間に水を撒きながら走行すること。最も急な部分では3両編成の登山電車で、先頭の運転台と最後尾の乗務員室の高低差は約3.6m。車両の力だけで登る山道の中では日本一の急勾配です。写真右は、箱根登山鉄道の強羅駅長で強羅管区長の大木賢治さん。



新箱からロマンスカーで約1時間半。箱根湯本駅は、山々に囲まれた自然豊かな土地です。春になれば桜が咲き乱れ、秋は紅葉。駅のすぐ傍に流れる早川など、都会に隣接する温泉街とは思えないほど風光明媚な景色に心癒されます。箱根湯本駅の周りには、近年オープンした最新の箱根名物のお店から、百年以上続く老舗までが揃います。観光に疲れたら、レトロな喫茶店で一休みするもよし。足湯につかるのも一興です。地元の人々の温かみを感じられるのも箱根の魅力。何世代にもわたって箱根に住み続け、受け継いだ伝統を守りながら、旅人を優しくもてなしてくれます。

都心から1時間半、自然豊かな温泉街



「お休み処 権現からめもち」の五色もち 500円（あんこ、きなこ、ごま、のり、おろし）。つきたての温かくて、のびのある餅は、観光客、地元の人々からも大人気。

1250年以上の歴史を持つ、関東屈指の神社

箱根神社で最も印象深いのは、山の腹にある御本殿から芦ノ湖に浮かぶ平和の鳥居までまっすぐにのびる石段です。その距離なんと500m。両脇に高くそびえ立つ杉の木が、厳かな雰囲気を出しています。

箱根神社の始まりは757年。源頼朝をはじめとする多くの武士が、心願成就、勝負の神として信仰したとされています。現在も、「箱根を制するものは天下を制す」とも言われる関東屈指の神社です。着実に事業や物事を進める力をもたらすようで、隣接する九頭龍神社 新宮と合わせて参拝すると、さらにご利益が増すとされています。

箱根神社
箱根町元箱根80-1

箱根は、江戸と大阪・京都をつなぐ要衝でした。明治時代になって関所が廃止され、現在の国道1号線の原形となる幹線道路が開通します。更に近代になり小田急電鉄が開通して、交通の至便性が高まりましたが、古くは旅人泣かせの土地だったと言われていました。それを象徴するのが、鳥居枕作詞、滝廉太郎作曲の唱歌「箱根八里」です。「箱根の山は、天下の嶮」という歌詞が、険しい山間の急勾配や石段が続く苦しい道のりを表現しています。箱根では、ラジオ体操の代わりに「箱根八里」の曲に合わせて体操をすることもあり、町の人々から親しまれ続けている一曲です。

東海道の要所「箱根関所」と「箱根八里」

江戸と大阪・京都の三都を結ぶ東海道上に設置された箱根関所は、特に厳重な監視体制がとられた関所でした。2007年に箱根関所が完全復元され、役人や足軽が詰めた建物や門を当時と同じ位置に設置。芦ノ湖と険しい山道に挟まれ、箱根関所がいかに監視の目を逃れにくい場所かを伝えています。建物の内部も、役人や足軽が座っていた位置、弓矢など取り締まり用の武器の保管場所などを文献に忠実に再現。同時にタイムスリップしたかのような気分を味わえます。

箱根宿を中心とする小田原宿から三島宿間の道のりは、東海道の中でも特に険しく、その距離から「箱根八里」と呼ばれて旅人に恐れられました。

箱根関所 / 箱根八里
箱根町箱根1番地



箱根関所所長の山内圭さん。復元された面番所にて。



無数の水の糸が岩肌をつたう「千条の滝」

「千条の滝」は、蛇骨川上流の水が無数の糸のようになって流れ落ちていることから、“千本の糸のような滝”を意味する名前がつけられたといわれています。滝といえば、高い場所から大量の水が激しく流れ落ちる風景を想像しますが、「千条の滝」は、25mの幅の岩肌を細長い水が静かに流れていて、清らかな様子が心を癒します。冬は所々に椿が咲き、夏はゲンジボタルが飛び交い、四季折々の表情を見せます。

1880年代、付近に「三河屋旅館」が建てられた後、創業者の榎本恭三がこの滝を発見し、より多くの人がこの滝を訪れることができるように道を整備したと言われています。

千条の滝
箱根町小涌谷507



赤穂浪士の討ち入り、伊賀越えの仇討ちと並ぶ“日本三大仇討ち”のひとつ、曾我兄弟の仇討ち。1193年、曾我祐成と曾我時致の兄弟は、父の仇討ちとして、源頼朝が開いた富士の巻狩に同行していた工藤祐経を襲いました。曾我兄弟の仇討ちは、南北朝時代・戦国時代に口承で広まり、江戸時代には歌舞伎の演目「曾我物語」にもなりました。国道1号線沿いには、「曾我兄弟の墓」と名付けられた五輪の塔があります。2人の墓とされる場所は全国に点在していますが、元箱根のこの五輪の塔は、2つの塔が寄り添って建てられている様子が曾我兄弟を連想させることから「曾我兄弟の墓」と呼ばれ出したそうです。隣に並ぶ低い塔は、兄・祐成の妾であり、2人の物語を広めた虎御前の塔とされています。

曾我兄弟の墓
箱根町元箱根103

『曾我物語』にちなんだ五輪塔

「ミシラン」…いいお店なのにまだまだ世間が魅力を知らない【魅知らん】名店を紹介していきます。

ファイブエル ミシラン★



旅の疲れをねぎらう優しい味わい「鯛ラーメン」

麵処 彩

「鯛茶漬け」なら馴染みがあるが、鯛ラーメンとは珍しい。一体なぜ思いついたのか。「もともと魚釣りが趣味で、鯛をよく釣っていたんです。釣った後は自宅で捌いて、刺身にして、圧力鍋で調理したりして食べていました。アラまで美味しく食べる方法はないかな、と、スープを作り始めたのがきっかけです」

店主の齋藤さんは、元サラリーマン。42歳まで、東京で建築関係の仕事をしてきた。店を共に切り盛りしている由紀子さんは当時からの釣り仲間と、釣りをして箱根の温泉につかって東京に戻るのが2人の休日の過ごし方だった。趣味が高じて箱根に移住し、ラーメン屋を開いたのは2010年12月のこと。

「釣りし放題だ！と心を弾ませて移住してきたけど、実際には店が忙しくて、釣りも温泉もほとんど行けなくなってしまいました(笑)」

趣味から閃いた鯛ラーメン。昆布と真鯛だけで作るシンプルなスープは、さっぱりとしていて、風邪の時でも食べられそうな優しい味わいだ。麺の後は、鯛めしの焼きおにぎりをスープに入れて、鯛茶漬け風にしてるのが齋藤さんのおすすめ。

「鯛めし焼きおにぎりは鯛の身を入れ、濃厚な鯛のスープで炊いています。おにぎりを入れるとスープにコクが加わって、少し違った味わいが楽しめます」

何を隠そう、立地は箱根湯本駅の正面。「オープン当時は『鯛ラーメンって何?』と訝しがりましたが、今では定着してきました」

今では海外からの観光客も押し寄せる。箱根名物の冠がつく日も遠くない。



麵処 彩
箱根町湯本 706 丸嶋ビル 3F
【TEL】0460-83-8282
【営業時間】11:00～17:30 スープがなくなり次第終了
※火曜日のみ14:30閉店
【定休日】水曜日

鯛ラーメン 880円
鯛ラーメンセット 1240円



箱根駅伝の石碑、記念碑

①芦ノ湖正面にある箱根駅伝の往路ゴール・復路スタート地点。
②「箱根駅伝栄光の碑 若き力を讃えて」のブロンズ像。台座には、第1回大会からの歴代優勝校の名前と記録が刻まれています。



90年以上の駅伝の歴史を凝縮

③館長の勝俣真理子さん。年毎のシード校ユニフォームは、専用のコーナーに展示されています。④ミュージアムは、往路ゴール・復路スタート地点に隣接。2005年に開館し、今年で12年目を迎えました。⑤ご子息から寄贈された、河野謙三氏のユニフォーム。

箱根駅伝ミュージアム
箱根町箱根167

箱根駅伝の歴史を伝える

毎年正月2・3日に行われる箱根駅伝。1920年の誕生から伝統を守り続け、今もマラソンランナーの憧れの舞台です。2005年にオープンした箱根駅伝ミュージアムでは、出場校のユニフォームや歴代の名シーンを振り返る写真など様々な展示をしています。

展示品の中でひととき歴史を感じさせるのが、箱根駅伝草創期のランナーであり、戦前から戦後にかけての政治家として有名な河野謙三さんのユニフォーム。早稲田大学の「W」のマークが縫い付けられた綿のタンクトップです。第二次世界大戦中には茶筒に入れて保管され、戦火を逃れるために疎開させながらご家族が大切に守り抜いてきた貴重な品。ミュージアムオープン後に、ご子息から寄贈されました。

ビジョナリーな人たち

田中康久 箱根もてなしの達人



箱根もてなしの達人

地元・箱根に熱い思いをかける、湯本新聞販売所の田中康久さん。町の振興を願って、ボランティアで観光客などに箱根の案内をしています。

田中康久（たなか やすひさ）

1954年、箱根町生まれ。祖父の代から続く湯本新聞販売所での新聞販売を生涯としながら、1980年代後半からは箱根の観光振興にも精力を注いでいる。



観光客から頼られるだけでなく、旅館や飲食店など、町内の人々からも集客方法の相談を受ける田中さん。町に一步出ると、あちらこちらから声をかけられます。

観光客が事前に情報を得られる、便利な手段はないのか。自身が苦勞した経験から、田中さんは自ら箱根の観光情報を発信するようになる。

「新聞配達の仕事をしているおかげで、日常的に箱根中をまわっています。色々な人と話をするし、ローカルな情報がダイレクトに入ってくる。自ずと箱根の事情通になりますから、この知識を箱根の観光に役立てたいと思ったのがきっかけでした」

1980年代前半に、富士通のFM17が発売されると、田中さんはいち早くパソコンを購入。メカにはほとんど詳しくなかったが、兎にも角にもインターネットを繋ぎ、掲示板を開設した。観光客からの質問に答える形で、箱根の情報を発信。書き込みは、1万件を超えた。

「2時間以内に回答することを心がけていましたから、気づけばパソコンの前にいる時間が長くなった。過去に同じ質問をされていたとしても、必ず一人ひとりに返信して、箱根が人を歓迎していること、もてなしの心があることを伝えたいかったです」

地道な活動が評判となり、役所をはじめ町中の人々が、テレビや雑誌から取材を受けるたびに田中さんを紹介するように。田中さんは町内外から企画や観光の相談を受ける、有名人となった。

折しも、バブルの崩壊、景気の悪化と共に、箱根の観光収入は低減の一途を辿るように。人口も、1980年の約2万人から現在は

田・東海道に面した温泉街、箱根町。江戸時代から宿場町として栄え、明治時代には国道1号線が敷かれて、人々が集まりやすいように真っ先に整備された。明治11年に開業された富士屋ホテルは、歴史的価値から第二次世界大戦中の爆撃を免れ、戦後もなく連合国軍の施設に指定されてダグラス・マッカーサーも滞在。常に国内外から注目され続けてきた、由緒正しき温泉街である。

現代においては、高度成長期からバブル期にかけて、熱海と共に観光全盛期に突入。当時流行した旅番組、雑誌では、頻繁に箱根が取り上げられた。箱根の企画が増えてくると、悩むのは雑誌の編集者や、番組制作会社だ。新情報がない。まだ知られていない。マニアックな情報が欲しい。そこで活躍したのが、湯本新聞販売所の田中康久さんだった。

「もとは、箱根に関するクイズ番組に、解答者として出演してほしい、と依頼されたんです。でも『私は全部わかっちゃうから面白くなりませんよ』とお断りした。代わりに問題作成を担当すると、予想以上に好評だったんです。それがきっかけで、『箱根のことは田中に聞け』と人づてに私の名前が広がり、メディアや雑誌に箱根情報を提供するようになったんです」

いつしか田中さんは、メディアから引っぱりだこに。箱根町内からも行事や観光の企画の相談を受けるようになり、2006年には箱根町観光協会認定の「箱根もてなしの達人」の5人に選ばれた。

約1万1600人へと落ち込み、財政も悪化したまま。昨年には箱根山の火山活動の影響で、町全体が大打撃を受けた。だが、黙っていても人が集まってくる町だったために、箱根には自ら観光情報を発信するノウハウがほとんどない。自分が先頭に立って発信していかなくては箱根が廃れてしまうという危機感が、今も田中さんを掻き立てている。

田中さんはあくまでも、肩書きは新聞販売

昭和29年、田中さんは田・湯本町に生まれた。生家は昭和元年に創業された湯本新聞販売所。山々に囲まれた特殊な地形をしているため、湯本新聞販売所の配達区域は非常に広く、また特定の新聞社に限らず、複数の朝刊紙、夕刊紙、スポーツ紙を扱う「合売」の形態を取っている。配達件数もさることながら、一人当たりの配達員の移動距離も長い。

「学生時代は、学校に行く前に300〜400軒ほど配達していました。箱根の山あいには配達するから、1軒1軒の間隔が広い。毎朝バイクで長距離を走っていたことから、気づけばツーリングが趣味になりました」

新聞配達の仕事はほとんど休みが取れないが、夕刊のない日曜日、月曜日が休刊日にあたるタイミングを狙って、ツーリングや旅行に出かけた。

「40半ば頃までは、休みのほとんどを国内旅行にあてました。47都道府県全て行きましたよ。道後温泉までバイクで1泊2日の旅に出たことも。とにかくバイクと旅行が好きで、あちこちまわりましたね」

趣味の旅行が、「箱根もてなしの達人」に繋がる。「日帰りや1泊2日の旅がほとんど。バイクでの移動だから、観光できる時間が限られていたんです。初めから目星をつけていいところ取りをしたかったのだけど、当時は観光情報誌やマップがほとんどなかった。駅に置かれたツアーのパンフレットから情報を集めました」

所の経営者。観光関連の活動はボランティアの立場を貫く。

「箱根は古くから続く町。今でも、長い歴史の中で培ってきた人と人との信頼関係で成り立っていて、箱根のそういう部分が大好きなんです。町内の人からの相談で金をとりにくいし、町外の人にはほとんど箱根を知ってもらって町を次の時代に残していきたいんです」

木村の視点

ロケ地を決めたのはいいが、窓口になっていただけのキーマン探しに苦勞して、田中さんにたどり着いた。湯本新聞販売所という名前にひかれ、「新聞を販売されているなら、地域情報に精通されているだろう」と連絡を取ったのだが、正解だった。名刺に「箱根もてなしの達人」ばかりでなく、「街角レポーター」「箱根湯本観光協会」「箱根大名行列保存会」「箱根ほたる愛護会」とあるように、文字通り町のコンシェルジュとも呼ぶべき人であったの

だ。首都圏からの至近性もあって、年間約2000万人が訪れていた観光客（京都市が5000万人である）こと比べるとすごいのだが、も、昨年は大涌谷周辺の噴火警戒レベル引き上げなどもあって、やや減少したという。約8割が観光に依存する町にとっては大きな問題である。今こそ「待ち」の姿勢を改め「攻め」に転じてはならない。田中さんの活動が個人レベルに終わるのではなく、町の大きなうねりになれば、再び日が差しってくるように



思う。町興しには「固定概念にとらわれないワカ者・枠にとらわれないバカ者・従来のやり方を踏襲しないヨソ者」が要るといわれるが、一番必要とされるのは「地域を愛する地元の人」だと思ふからだ。田中さん、ハーレーで走り過ぎて転ばないように！

毎年恒例の駅伝と 豊かな自然が魅力の町



箱根駅伝まつわるトリビア

新春恒例、各大学のランナーが襷をつなぐ「箱根駅伝」。そんな箱根駅伝まつわる様々なトリビアをご紹介します。

1. 選手を先導する「白バイ隊員」はエリート中のエリート

名誉ある白バイ隊員を務めることができるのは、白バイ競技会で入賞するようなエリート中のエリートのみが抜擢。

2. 元々、アメリカ大陸横断をする日本人を探すために行われた

1920年2月14日、「アメリカ大陸の縦走での横断を実施するための代表選考会」という位置づけで第1回箱根駅伝は開催された。

3. 初めてテレビ中継をしたのは「テレビ東京」

1979年に最初の箱根駅伝中継を行ってから、1986年までテレ東が放送。翌年から現在に至るまで「日本テレビ」から放送されている。

4. 1区間のごぼう抜き最多記録はなんと「20人抜き」

85回大会、2区を走った日本大学のギタウ・ダニエル選手は22位でたすきを受けると、そこから20人をごぼう抜き。

5. 襷に「御守り」は不純?

かつては早稲田大が東郷神社（東京）、國學院大が伊勢神宮（三重）の御守りを襷に縫い付けていたが、88回大会（2012年）から禁止になった。襷は純粋に襷として使用したほうが良いだろうという判断。

箱根といえば、なんといっても毎年1月2・3日に開催される**箱根駅伝**が有名です。今年で92回目を迎えました。昔から全国の注目を集めてきましたが、最近では箱根駅伝を見るためのツアーも組まれるようになりました。

箱根町の産業は、観光が約80パーセントを占めています。近年、箱根にも韓国、台湾、中国など外国からの観光客が増え、海外へのプロモーション活動にも力を入れています。喜ばしいことに目標数字の達成に近づいてきています。

ただ、昨年は箱根山・大涌谷の火山活動の影響で、国内外含む箱根全体の観光客数が落ち込んだことも事実で、税収が冷え込むなど町全体が大打撃を受けました。しかし、昨年末の時点で「ふるさと納税寄付金」がなんと5億2000万円を突破しました。一昨年の548万円から約100倍以上伸びており、多くの方々が箱根町を心配し、支えようとしてくださっていることを実感しました。年明けには例年通り箱根駅伝を開催でき、安全性のアピールにもなりました。今年は再び観光産業が伸びていくこ

とを願っています。

箱根は、東京都心から車や電車を使えば1時間半ほどで移動できる**便利な観光地**でありながら、**自然が豊かな**ことが魅力です。**富士山**という日本最大の観光資源を町内各地から眺めることができ、桜の季節には山桜を含めると1カ月以上もの間、観賞をすることもできます。桜といえば吉野が名所ですが、それに匹敵するくらいに箱根の**桜**も美しいと誇りを持っています。木の種類が豊富なおかげで、江戸時代には箱根寄木細工など独自の伝統工芸も発達しました。箱根十七湯と言われるように泉質もよく湯量が豊富な**温泉**も湧きますし、**歴史的遺産**も数多く残っています。まさに自然と共存することで成り立ってきた町だと言えます。

箱根が観光地として急速に発展する中で、最も大切にしていたのが、いかに自然と調和しながら開発するかということです。今年、**富士箱根伊豆国立公園**が**記念すべき80周年を迎えます**。ぜひお越しください。